

【春子懷中物】

いよいよ本格的な夏が近づいてきました。

7月は七夕。7月7日の夜に、織姫と彦星が天の川を渡って1年に1回だけ出会えるという伝説です。今月の“イッピン”は、この七夕の伝説に負けない(?) 實と春子の仲睦まじい様子にまつわる「春子懷中物」についてご紹介したいと思います。

實と春子が結婚に至った馴れ初めは、春子の父であり實の卒業時、海軍兵学校校長であった仁礼景範中將から「春子をもらってはくれまいか」と申し出を受けたことに始まります。實は家柄の違いを理由に何度も断りますが、上官の山本権兵衛の説得により明治25(1892)年にめでたく結婚。實35歳、春子19歳でした。

結婚後、實を支える春子の姿はまさに「夫唱婦隨」そのものでした。晩年のある日、夫妻の夕食での様子を招かれた客人が語っております。『春子はニコニコしながら實にエプロンを掛け、首のうしろで結ぶ紐も春子が結ぶ。食事が始まると葡萄酒をコップになみなみとつぎ、それを待ちかねるように見つめる實。おいしそうに飲み干し「もう一杯!」との催促に、「いけませんいけません、一杯にしておいて下さいませ」とたしなめる。「お客様が見えているからもう一杯はいいだろう」「いいえ、お客様がいらっしゃっているから一杯でよろしゅうございます。あとは、お話をお酒になさるのです。」實は客人の顔を笑って見ながら、「これなんだからねえ…」と春子に逆らわず、「妻のいうことによく従う夫」であった。さらに、茶碗蒸しを口にしている時には、口のまわりや口髭にくっついてしまう實を見て「ハイハイ、ちょっとお待ちあそばせ」と言いながらきれいに拭き取ってあげる春子。細やかに世話を焼く春子の振る舞いに實は子どものように従順で、春子もまた慈母のようであり、二人のこうしたやり取りは忘れがたいものであった。』と述懐しています。

事件後春子は昭和20(1945)年3月に水沢へ疎開。實が亡くなった26日の月命日には、雨の日も風の日も休むことなく毎月必ず人力車で小山崎の墓地へお墓参りに出向いていました。墓前には生前の好物を供え、在りし日の實の様子を身近な人などに話し偲んでいました。およそ4cm×10cmとコンパクトな大きさのひも付きの絹製小袋の中には、實の遺髪と写真が納められています。亡きあとも實を大切に想い続け、共にありたいと願う春子の気持ちが感じられる一品です。今回ご紹介したこちらの懷中物は1階南側展示場にて常時展示しております。ぜひご覧ください。



絹製小袋 (左下)



遺髪と實の写真

参考:「斎藤夫妻を偲ぶ」

(斎藤實記念館建設実行委員会、令和2年)